

青年期における不健康な異性関係と境界例心性の関連

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
鷺岡 ゆき

本研究では、青年期の異性関係にみられる不健康な関係性に着目し、青年期に特有な境界例心性の観点からの検討を試みた。本研究の目的は、以下の二点である。①青年期における不健康な異性関係の実態を把握すること、②青年期における不健康な異性関係と境界例心性の関連を検討すること。

大学生に質問紙を配布し、403名に回答を得た。独自に作成した異性関係尺度、境界例心性質問紙（安立，1999）については因子分析を行い、異性関係に関する自由記述についてはKJ法を援用して分類した。

結果、非臨床群であっても、1～3割の青年が日常的にネガティブな異性関係を体験していることが明らかになった。青年が交際相手へ行う不健康な行動には「人格の否定」「束縛・支配」「自己中心的な言動」「猜疑心・独占欲」があり、青年が交際相手から受けている不健康な行動には「束縛・支配」「人格の否定」「無関心」「過干渉」がみられた。また、交際経験の多い男性は、「自己中心的な言動」を相手にとりやすく、交際人数の多い女性は「束縛・支配」を受けやすいことが明らかになった。自由記述の分析から、青年の考える不健康な異性関係は、①性的逸脱、②非対等な関係、③依存的な関係、④法的な問題を孕んだ関係、⑤生活・健康に支障をきたす関係、⑥友人関係に支障をきたす関係、⑦周囲を巻き込んだ関係、⑧金銭の絡んだ関係という8カテゴリーに分類された。さらに、不健康な異性関係は、周囲の青年にもネガティブな影響を与えるものであることが示唆された。

境界例心性質問紙の因子分析では、<同一性拡散>、<感情易変性・衝動性>、<孤独感・見捨てられ不安>、<対人関係の不全感・低い自尊心>の4因子構造が得られた。異性関係尺度との相関を調べたところ、男性の「人格の否定」は、<同一性拡散>、<感情易変性・衝動性>および<孤独感・見捨てられ不安>と、「束縛・支配」は<感情易変性・衝動性>と、「自己中心的な言動」は<対人関係の不全感・低い自尊心>と、「猜疑心・独占欲」は、<感情易変性・衝動性>といずれも正の相関が見られた。女性の「人格の否定」と<同一性拡散>、<感情易変性・衝動性>および<孤独感・見捨てられ不安>と、「無関心」と<対人関係の不全感・低い自尊心>の間に正の相関があった。「過干渉」と<対人関係の不全感・低い自尊心>の間には負の相関がみられ、「束縛・支配」は、境界例心性に関わるどの尺度とも相関がみられなかった。

上記の結果から、青年期における不健康な異性関係の背景には、境界例心性が複合的に関与していることが明らかになった。すなわち、異性関係にみられる問題行動の背景にある、青年の自我の問題や孤独感に焦点化した支援を行うことで、交際相手との関係性の改善にもつながる可能性が示唆された。